

【結果】 検討①より、2型群において導入前と比べて導入後3、6ヶ月にHbA1cに有意な低下 ( $p < 0.05$ ) を認め、1型群では有意な低下は認められなかった。検討②より、1型群中の良好群において導入前と比べて導入後3ヶ月で低血糖発現頻度の増加傾向が認められた。

【考察】 検討①より、2型群では導入後にHbA1cは有意な低下を認め、さらに低血糖発現頻度に影響を与えていなかったことから、従来のインスリン療法で良好な血糖コントロールを得られなかった2型糖尿病患者において「ランタス®注」の導入は、低血糖発現頻度の増加をもたらすことなく血糖値を下げるのに有効であると考えられる。検討②より、内因性インスリン分泌能が著しく低下した1型糖尿病患者に対して「ランタス®注」を導入する場合には、再現された基礎分泌インスリン量が一時的に過剰になりやすくなるため、低血糖発現頻度の増加に注意を要すると考えられる。

#### PD-58.

### 腹水コントロールが困難な糖尿病性腎不全患者にイコデキストリン (Ico) 透析液を使用したPD療法が有効であった1例

(八王子・腎臓内科)

○渡辺 妙子、吉田 雅治、中林 巖  
吉川 憲子、明石 真和、高良 洋平

【症例】 52歳女性

【主訴】 下腿浮腫、腹部膨満感

【現病歴】 2002年8月糖尿病性腎症 (ネフローゼ症候群) を指摘され、以後難治性浮腫・胸腹水にて入院を繰り返していた。2003年5月胸膜癒着術を施行し、胸水は消失したものの、低アルブミン血症を伴う難治性腹水が認められるようになったため、2004年6月腹水コントロール目的で入院となる。

【入院後経過】 入院後、腹水穿刺、アルブミン・利尿剤投与にて加療を行っていたが、改善せず、腎機能悪化 (24Cr3.3 ml/min) 及び貧血の進行を認めたため、腹膜透析導入 (Ico+APD) となった。導入1ヶ月後には腹水・下腿浮腫ともに軽快し、血清アルブミン値も導入前後で1.8 g/dl から2.9 g/dl まで上昇した。ADLも改善したため、退院となった。

【考察】 慢性腎不全患者における低アルブミン血症

を伴う腹水は難治性であることが多い。

そのような症例に対し、CAPDの有効性はしばしば報告されているが、Ico+APD療法での報告はない。今回我々はIco+APD療法にて難治性腹水のコントロールに成功した例を経験したので報告する。

#### PD-59.

### 救命救急センターにおける重症度と栄養管理の実態

(八王子・救命救急センター)

○松岡 佑嗣、池田 寿昭、名倉 正利  
黒木 雄一、鷹取 央  
(八王子・特定集中治療部)  
池田 一美、松下美季子

救命センターへ搬送される患者の多くは、来院時にショック期にあり高度な侵襲を伴っている。重症外傷や広範囲熱傷等では、受傷後2-3日のショック期に呼吸、循環動態の安定に努め、実際、栄養管理の開始は3-4日以降になることが多い。目的および方法：当救命救急センターへ入室した症例を対象に、経管栄養施行可能の有無から重症度および予後 (28日生存) との関係を検討した。対象は平成16年8月より6ヶ月間に検討し得た77名 (62±19歳)。客観的重症度評価法としてAPACHE IIスコア、多臓器不全評価としてSOFAスコアを入室後評価し、入室時および7日後の総蛋白量 (TP)、膠質浸透圧 (COP) を測定した。結果：APACHE IIスコアは22.4±10.0、SOFAスコアは7.2±3.1であった。入室時のTPおよびCOPは5.8±1.3、15.8±3.4で7日後はそれぞれ5.4±0.7 g/dl、16.4±2.4 mmHgであった。経管栄養開始までの期間はICU入室1日から28日 (中央値4日) と幅広く一定の傾向を認めなかった。治療内容として人工呼吸器装着78%、輸血施行42%、血液浄化療法24%で何らかの手術施行は25%であった。28日後の転帰は生存60名、死亡13名で生存率は82%であった。次に、経管栄養施行群と非施行群を比較すると、施行群の生存率は86%、非施行群では67%であり、従来から言われているように経管栄養が予後に影響していることが伺えた。しかし、APACHE IIスコアでも、施行群では20.6±9.2、非施行群では29.3±10.8と客観的な重症度も栄養管理施行に影響を及ぼしている可能性が示唆された。結語：救命救急センターにおける栄養管理は

積極的に行われるべきものであるが、重症度そのものがその施行に影響している可能性が考えられた。

#### PD-60.

#### Right gonadal arteries as running behind inferior vena cava

(Department of Anatomy)

○Hayato Terayama, Munekazu Naito, Shogo Hayaishi, Yoichi Nakamura, Takayoshi Miyaki, Masahiro Itoh

The testicular and ovarian arteries usually arise from the anterior wall of the abdominal aorta below the renal artery. Especially, the right arteries pass anterior to the inferior vena cava and run obliquely downward to the gonads. In this study, unusual cases of the right gonadal arteries were observed in two Japanese cadavers, one male and one female. They arose from the abdominal aorta below the origin of the right renal artery and passed posterior to the inferior vena cava. They then run obliquely downward and laterally to reach the pelvic cavity. The left testicular artery arose from the renal artery, while the left ovarian artery arose from the abdominal aorta above the origin of the right ovarian artery. With other variation of the gonadal arteries, the embryologic and clinical aspects of the gonadal arteries passing behind the inferior vena cava are discussed.

#### PD-61.

#### Di(2-ethylexyl)phthalate 投与マウス精巣の生化学的解析

(大学院単位取得・解剖学第一専攻)

○三浦 由美

(解剖学第一)

寺山 隼人、内藤 宗和、北岡 三幸

小茂田文子、伊藤 正裕

ポリ塩化ビニル製造時の可塑剤として汎用されている Di(2-ethylexyl) phthalate は抗アンドロゲン作用を介した男性生殖器障害 (精巣萎縮)、肝臓のペルオキシソーム増殖および細胞複製作用により肝肥大を誘発させるなど様々な有害作用を有した化学物質であ

り、現在内分泌攪乱物質として問題視されている。先に我々は、Di(2-ethylexyl)phthalate 2% 含有餌をマウスに自由摂取させた結果、5日目から精子形成障害が起こり始め、15日もすると重度な障害を呈する事を観察している。そこで、本研究はその中間の10日目という Germ Cell がまさに脱落するという期間に焦点を合わせ、精巣、肝臓、腎臓および膵臓に対する影響を検討する目的で、生化学的解析および組織化学的解析を行ったので報告する。

#### PD-62.

#### 食事療法の疾病進展予防効果およびそれに関連する心理社会的要因についての研究—慢性腎不全に対する低たんぱく食事療法における検討—

(専攻生・衛生学公衆衛生学専攻)

○金澤 良枝

(衛生学公衆衛生学)

大谷由美子、下光 輝一

(腎臓科)

中尾 俊之

【目的】 食事療法の遵守・実行による疾病治療効果の検討と同時に心理社会的要因との関連性を明らかにすることを目的に、慢性腎不全の低たんぱく食事療法についてとりあげ検討した。

【方法】 対象は、食事療法を初回指導後3ヶ月以上経過している慢性腎不全患者65名(男47、女18)、年齢 $61.8 \pm 10.6$ 歳。対象者に食事療法の compliance 評価と腎機能低下速度、QOL の評価 (SF-36)、心理的側面の評価 (POMS)、Self-efficacy 調査、Social support 調査を行い食事療法遵守群 (A) の男性群 (A-m)、女性群 (A-f)、非遵守群 (B) の男性群 (B-m)、女性群 (B-f) で比較検討した。

【結果】 A では B に比較し、腎機能低下速度は抑制されていた。SF-36 のスコアは、男女とも両群間に有意差を認めなかった。POMS による気分、感情の主観的側面の評価スコアは、A-m、B-m の両者間に有意差は認めなかった。しかし A-f と B-f では、「抑うつ-落ち込み」が B-f で有意に ( $p < 0.05$ ) 高値であった。Self-efficacy 得点は、A-m では B-m、B-f に比較し有意に高値であった ( $p < 0.05$ )。また A-f は B-f に比較し有意に高値であった ( $p < 0.05$ )。Social support は、A-m では B-m、A-f、B-f に比較し有意に高値であった ( $p < 0.05$ 、